多様な性のあり方と、幸せと人生と笑いを考える、にじいろたまご通信！

にじたま

Vol.33
2023年　春号

目次

たまレポ03（こうえんデビュー）　… 1
特集：新旧代表インタビュー　… 5
たまレポ04 sideA（ヒロロで講演）　… 10
たまレポ04 sideB（ヒロロで講演）　… 11
セミナー行ってきたよ（弘前市）　…13
SMASH HIT!、コラム　…14

たましポ

レポート03 こうえんデビューの巻

講演準備でやったこと

・テーマ決めて
・過去ふり返って
・内容考えて
・パワポつくって
・時間調整して
・あとは練習！

※お話いただいてから3～4ヶ月の間かな

いや講演準備めちゃくちゃ大変だった

それにしても、今回こういう機会に、過去をふり返ったわけですが…

身体違和に悩んで、消えてしまいたいと思っていたことや

うわぁぁぁぁ

友達と山菜採りに行ってやったことや

とのさどー!!

タイにいって、手術したり、観光したり、虫たべたり

トモダチドン引き

いろいろあったなぁ…

ほんと、講演会、やってよかったなぁと感心…

まだやってないよ？

↗あと、関係ない思い出まじってるよねぇ↖

虫だらけ

②

そんなこんなで
令和4年11月12日。
秋田は大館。

本日のイベントは

トランスジェンダーの事実と
「自分の人生を生きる」を考える
映画上映と講演会

と題しまして。
第一部は映画上映。
そして…

そんでは、第二部
あきさんの講演、
タイトルは、
「トランスのその先」、
よろしくお願いします

えーただいま
ご紹介に与り
ました—

ぴぎゃあ!!!
こわいよ スライド大丈夫!?
きっこえてる?
時計どこ? 早口かな!?
※心の叫び

トランス前後の
生活や仕事
経験談や
今、感じて
いること、
最後は
世界平和に
ついて(笑)
話し…
たけど
緊張しすぎて
あんまり
覚えていません

その後は
質問コーナーもあり、
いろんな意見質問
いただいて、
なんとか、
終わりました。

教育現場では、
どーいった対応が
求められて…

え、えっと〜

③

ちゃんと話せたかな
大丈夫かな？
伝わったかな…

とぼとぼ

緊張しすぎて
記憶がない…

後日…

あ、真木さん
からラインだ

ピコピコ

講演のアンケート
おくりますねー

一生けんめい
がんばってい
ますね

女性としての
とまどいに共感
しました

自分らしく生きて
ステキだと思

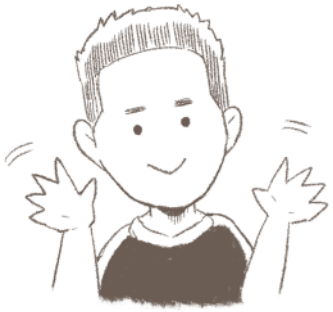
質問の受け答えも
よかった

お話わかりやす
かったです

感動しました

うれしい

ESTOの真木さん、
北部敷共同会画センター
スタッフのみなさん、
ありがとうございました!!



主催の性と人権ネットワーク ESTO
真木 柾鷹（まさき まさたか）さん

大変だったけど、
やれてよかったです
たまに過去と向き合う
のもいいですね

お疲れさまでした！
今後も楽しみながら
いろいろやってきましょ！

④

スクランブルエッグ 新旧代表インタビュー

2022年11月、スクランブルエッグはサークル発足から15年を迎えました。2019年には代表の交代がありましたが、その年の冬に新型コロナ感染症が発生。それ以来、スクランブルエッグでも実際に集まるようなイベントは自粛となり、みなさんにご挨拶できる機会がほとんどなくなってしまいました。

そこで今回は、現代表のヒロと、前代表である事務局の創にもインタビュー。それぞれの「あの頃のこと」や活動への思い、お互いへのコメントを、一人ずつ聞いていきます。

◇取材日：2023年1月24日（ヒロ）、2月9日（創）
◇インタビュアー：藤

＊＊＊＊＊＊

◆　現代表・ヒロへのインタビュー　◆

藤：代表がヒロさんになられてしばらく経ちましたが、今までなかなか紹介の場が無かったということで、改めてインタビューをさせていただくことになりました。

インタビュアーは、最近メンバーになりました藤（ふじ）が担当します。よろしくお願いします！

ヒロ：はい！　よろしくお願いします。

スクランブルエッグに参加したきっかけ

藤：まず代表になったお話の前に……最初、スクランブルエッグの活動に参加したきっかけって、どんなものでしたか？

ヒロ：初めてスクランブルエッグに連絡したときは、大学2年生ぐらいだったと思うんですけど。当時、大学でセクシュアルマイノリティのサークルを作ろうと思っていて。どういうことに気を付けていったらいいかとか、どんな活動していったらいいかってのが分かんなかったので、ちょっと勉強させてもらおうと思ってコンタクトしたのが、最初のきっかけです。

藤：そうだったんですね。最初は、スクランブルエッグの活動に参加するっていうよりは、まず大学でサークルをやるためにって形だったんですね。

ヒロ：そうですね。そっちをやろうと決めたほうが先でした。

藤：大学時代はそのサークル活動をされてて、社会人になってから、スクランブルエッグにより沢山関わるようになってという感じでしょうか。

ヒロ：活動自体には学生時代から参加していました。そのときは代表とか全然そんなことは無く、いちメンバーとしてできる活動に参加していたっていう感じでしたね。

藤：その頃って、スクランブルエッグはどんなことをしていましたか？

ヒロ：その頃は、機関紙を発行しようって話があった気がします。あと弘前市で『カルチュアロード』っていう、路上文化祭みたいな感じの街中でのイベントがあって。それに出展したらいいんじゃないかという話を創さんとしてて、「ああじゃあそれやろう！」ってそれに向けて準備したりしてましたね。

カルチュアロードで、「弘前IDAHOメッセージ展」を開催

藤：セクシュアルマイノリティの団体というと、「当事者の居場所づくり、相談できる場づくりをする」って方向性のところもあって、自分は大学時代はそういう団体に居たんですけど、スクランブルエッグはずっと発信がメインで活動しているんですね。

ヒロ：そうですね！　スクランブルエッグって、セクシュアルマイノリティ“ボランティア”サークルで、ボランティアって付いてるんですよ。なので、ボランティアをするって目的でまず集まっているところがあって、それで参加しやすさを作ろうっていうところも良いと思ってます。

自分たちとか、同じような人たちも含めて生きやすいような社会を作るために、なにか自分たちにできることをしようという形だったので。「活動できる範囲での活動」みたいなものがメインで始まってますね

記憶に残る“カルチュアロード”

藤：これまでいろいろな活動があったと思うんですけど、「特にこれは記憶に残ってるな」ってイベントはありますか？

ヒロ：うーん、それこそ、最初のカルチュアロードは結構印象に残ってます。スクランブルエッグって人前に出ることをほとんどしない団体なんですけど、そのときは、わりとこう人通りのある中で、「こういう人たちがいますよ」というようなアピールを少しするわけで。

当事者じゃない人も含めて居るサークルだし、勿論バッジ

なんかを付けてるわけじゃないですけど、なんとなく「そう(当事者)なんだろうな」みたいに思われる、そういう目がある中で話すっていう。そういうことは初めてだったし、初めてであり最後でもあった気もするんですけどね。

藤:そういうところが特徴的なイベントで、記憶に残ってるわけですね。でも、こうやって話題に出してくださるってことは、結構手応えとか楽しさもあったんでしょうか。

ヒロ:うん、それもありましたね。準備するのも楽しかったし、あとはこう歩きながら、首から「同性愛についてどう思いますか」ってアンケートをぶら下げてシール貼ってもらうとかしてたんですよ。そういう生の反応を、自ら受けに行く、知りに行くことってあんまり無いので。

藤:無いですよね。

ヒロ:それは新鮮だったし、いろんな人いろんな反応があって。子どもの手を引いて足早に過ぎ去ろうとするお母さんがいたり、その一方で、どう思いますかという問いに、「ま、同性愛も愛だべな」って言ってくれる年配の方もいたり。

　割とあったかい反応の方が心に残っているので、それは今も思い出になってます。

藤:それは大きいですね。本当に道行くひとりに声掛けてってなると、どんな考えを持ってるのか分からないし。温かい反応もあって本当に良かったです。「愛だべな」っていう、それが津軽弁だったのも、今聞いてて「ほんとに地元でそういう話が出たんだ!」って実感できて嬉しかったです。

ヒロ:うーん今考えるとね、なんでそんなことやろうと思ったのか?　ってくらい、たまご(=スクランブルエッグ)にしては、アグレッシブだったっていうか。

地域の大きなイベントにサークルとして参加した、初めての体験

スクランブルエッグでの役割

藤:例えば、自分が代表になって初めてのイベントとかも記憶に残ってたりしませんか?

ヒロ:えー?　覚えてません!

藤:あれ?!　すごくスムーズだったんですね……。

ヒロ:あの、代表になったところで、私自身のやることは変わってなくて。外交はコロナの影響であまり機会がなかったり、事務的なことや話し合い、日々の相談は運営部(役員や事務局、相談役)でしていたり。そういうメンバーが居てくれるので、ま、代表として何かということは本当にしてないんですよ。

藤:代表だからということじゃなくても、自分の得意な分野を活かして、全体の活動が続いていくなら、それが良いですよね。ヒロさんは、特に自分がよく任されるなっていうジャンルはありますか?

ヒロ:任されるジャンルか、特に……本当に仕事してないからなっていう感じなんですけど、「何かやりたい」という気持ちが強くて、こういうのやったらいいなってアイデアは出てくるので、言い出しっぺになるとかはあります。

藤:めちゃくちゃ必要な人材じゃないですか。

ヒロ:いやいや。学生の時はそれこそ時間もたくさんあったし、やりたいことがあれば自分で動いてできる余裕があったんですけど。社会人になってからは、自分が岩手だったりまた他県だったり、離れて生活してあんまり活動に参加できない時期もありました。

　最近はオンラインで集まる機会があればできるだけ参加するようにしてます。あとは講演ですね。先生方の研修会とかに呼んでいただくこともあって、そういう機会に青森に行ったりしています。

身近な存在と実感してもらえるよう、体験などもお話している

藤:なるほど、この前オンライン交流会で集まった時にご一緒した記憶がありますよ。めいめい楽しくしてるんですけど、ヒロさん途中から猫ちゃんとクッキングタイムに入ってて、見てて楽しかったです。

ヒロ:自由にやってます!

藤:代表さんが創さんから変わるって聞いたとき、新代表どんな方なんだろうと思ってたんですが、ヒロさんもニコニコしてて雰囲気に似通ってるとこがあって。スクランブルエッグの代表になる方って、なんかみんな朗らかで笑顔な人なんじゃないかっていう。

ヒロ:話し方がいつもニヤニヤしてるって言われます。

藤:集まったときの雰囲気がいつも良いです、ぜひそのままで。

活動の原点

藤:ヒロさんは大学で「サークル立ち上げて活動しよう!」っていうくらいだから、考えたことを形にするのが得意に見えて、すごいなと思うんですけど。

ヒロ:いや、得意というか……友達にカミングアウトされて、自分もカミングアウトして、初めてちゃんと話せる人ができたっていう経験があって。話せる人が一人でもいて、本当のことを

知ってくれてるって、すごく大きくて世界変わるなと思って。
藤：本当に。SNS上で似たような人、仲間がいるっていうのは分かっていても、毎日行く学校とか歩いてる街とか、その中にわかってくれてる人がリアルに居るって実感できると、心強さが違いますよね。
ヒロ：そうなんですよ。だから、そういう関係を作れる場所を作りたくて、大学でサークルを作ろうと思いましたね。誰にも言えずに一人でいる人って、その時はまだまだいっぱいいるって思ってたし。同じような人が本当にいるんだなってちゃんと思える場を作りたかったっていう。
藤：なるほど、じゃあそれは、大学の時のサークルでもスクランブルエッグでも、ヒロさんとしては思いに共通するところがあるんでしょうか？
ヒロ：うん、そうですね。スクランブルエッグでは、啓発とかそういう活動に結構力を入れているので、場を作ることについてはできる範囲でやろうっていうことを考えているんですけど。

前代表・創のこと

藤：あと伺ってみたかったのが、ヒロさんから見ての前代表、創さんの印象ですね。ヒロさんから見てどんな人ですか？　長い付き合いだと思いますけど。
ヒロ：長いですね。大学2年生からだから、13年とかそれぐらいですね。なんか、当時はもうちょっと大人で怖いイメージとかあったと思います。でも、それ以外は最初からあんまり変わんないですね。
　優しいし、なんか喋るの好きで、結構人が好きというか。年上の人に言うのも変な話だけど、人懐っこい人というか。
藤：ああ、なんか分かります。話しやすいし、年下でもフラットに見てくれる方というか。
ヒロ：うんうん、10歳ぐらい下の子でも、顔の正面で話せる人みたいな印象です。
藤：自分も高校生の時、そういう風に話してもらった記憶があります。
ヒロ：変わってないですねー。
藤：最後に、もし創さんに面と向かっては聞けないこと、言えないことがあればここで！
ヒロ：面と向かって聞けないこと……結構言ってるけどな。あのー、「すべて頼り切ってますが、これでいいのか」ってところはまああります。「もうちょっとなんかしてほしいと思ってんじゃ？」と思うんですけど、知らないので、そこは心配してます。

～ヒロ宅の猫ちゃん、藤宅のモルモット乱入～

サークル内にアニマル部発足？

藤：ではでは、寒い中ですけど、猫ちゃんとゆっくりお休みになってください。ありがとうございました！
ヒロ：ありがとうございました！

◆　前代表・創へのインタビュー　◆

現代表・ヒロのこと

2019年の青森インターナショナルLGBTフィルムフェスティバルで、
展示イベントの紹介と代表交代のご挨拶をさせていただいた2人

藤：前代表って言いますけど、創さんが初代で、交代までずっと代表でしたよね。そもそも代表交代しようってなったのはどういったことがきっかけで？
創：体調不良が直接の原因ではあるんですけど、それまでもどっかで代わらなきゃっていうのはずっと考えてましたね。それこそ、最初はひとりで始めたサークルだったけど、「自分のもの」っていう風になっちゃいけないと思ってたので。
　スクランブルエッグは合議制で、相談事はスタッフで協議して決めるっていうスタイルで、トップだけで全部決めるみたいなことはやらないんですよ。
藤：「合議制」っていうのよく聞いてたので、キーワードみたいに感じます。
創：それで、毎年総会の時に役員改選をしています。やっぱり時代も変わっていくし、そういうところでも代表は変わったほうがいいなと思いながら。でも代表っていう肩書きが付くと、表に出なきゃいけない場面も出てきますし、大体なる人がいないのでそのまま引き継ぐことが多いんですが。
藤：ヒロさんは学生のころに初コンタクト取って、社会人になってからもずっと活動に参加してくれてるっていう形でしたね。
創：そうですね。ヒロさんは結構古株なんですけど「（代表を）代わるんだったらコイツだな……」と割と早い段階から目を付けてました。（笑）
　大学を卒業してからは各地を転々とされてて、途中ほとんど参加してないような時期もあったんですけど。でもなんか戻ってくると普通に、いつも通り活動してるんですよ。
藤：良いですよね、一定のあの空気感でいてくれるところというか。ヒロさんって、創さんから見てどんな方ですか？
創：性的マイノリティっていうテーマだけじゃなくて、いろんな経験を積んでいるから評価されてる、と思います。視野が広い、そんな感じですね。こう、凝り固まってないというか。柔軟な考え方ができる人ですね。

何かやるっていう時も、そのひとつひとつを楽しんでやれる人なんで、ヒロさんと企画考えてるともうめっちゃ楽しそうみたいな感じで。どんどんやろうやろうみたいになって、後々大変なことになるんですけど。（笑）

あと初期のころは、なんかサークルの中ではマスコットキャラみたいな立ち位置でしたね。

藤：あの人がいるとなんか和むなー、部屋が一段階明るい気がしてくるよねって感じの。

創：そうそう。みんなそんな風に良い感じには言ってなかったですけど。（笑）　いじられ役というかね。愛されてますよね。

やっぱり“カルチュアロード”は忘れられない

藤：ヒロさんはアイデアマンだっていうお話でしたが、特にこのイベントの時！　みたいに記憶に残ってることはありますか？

創：サークルを立ち上げた翌年から参加してくれてたと思うんですけど、その年に弘前でのカルチュアロードっていうイベントでIDAHOメッセージ展を一緒にやったんですよ。

5/17のIDAHO（国際反ホモフォビアの日）に合わせて「多様な性にYES！」っていうのを合い言葉に各地でアクションやってる人たちがいて、いいなって思って。何か発信するのって田舎だと目立つしすごい勇気が要るけど、「YES」だったら、なんか共感してくれる人がきっと寄ってくれるだろうなと。

全国的にはメッセージを街頭で読み上げるアクションが中心だったんですが、青森県でそれやるとみんな離れていっちゃうな、顔も晒さなきゃいけないし、それをしないで出来そうなものっていうので、展示がいいなって。そしたらヒロさんも同じこと考えてて、やろうやろうとなって、ヒロさんが立ち上げた大学サークルとの共催みたいな感じで、大学のテントも借りてきてくれて。

大学サークルの活動の一環として借りてくれた備品

藤：大学のテントですか？

創：あれが多分、人前に出てイベントをするっていうことを本格的にやったいちばん最初だと思うんで、憶えてますね。それを一緒に、終始楽しくやれたんですよね。あれはヒロさんの力がおっきかったな。

藤：話してるとき、ずっとニコニコしていてくれますしね。

“ボランティア”の意味

藤：お互いを褒め合う空気とか、やろうって言ったことをどんどん実現に持っていく感じとかあるなぁって思うんですが、活動する中でこうしたいという方針ってありますか？

創：最初のころからモットーとして挙げているのが、「無理せず楽しく出来ることを」っていうところですね。自分が経験してきたことも元になってるんですが、覚悟を決めて、何か犠牲にしなきゃいけないかもっていう気持ちを抱えながら活動するのって、すごくハードルが高くて。

藤：そうですよね。

創：ほぼみんなクローゼットで、なにかモヤモヤしたりしながら生きてる。そんな中で、ちょっと勇気を出してサークルに入ってみたら結構楽しいし、自分の名前とか顔とか出さなくても活動できるし、みたいな敷居の低いなにか出来る場所っていうのを目指して始めたので。

藤：まさに、ボランティアサークルっていう名前にも表れてますよね。

創：そうそう、ボランティアの意味なんですけど。本当は「スクランブルエッグ」だけで名前なんですけど、当時って、セクシュアルマイノリティとかなんとかって言葉はまだあまり知られていなくて。じゃあ何してる団体なの？　っていうことがあったので、「セクシュアルマイノリティボランティアサークル」とつけるようにしていました。

ボランティアって無償奉仕みたいな意味で使われがちですけど、実はうちではそういう意味ではなくて、どちらかというと「有志」というか。「これを一緒にやるんだ」「こういう風になっていったら良いね」っていうことを、共感して一緒にやれる人たちで集まりたい。友達作りとかそういう場ではなくて、自分のできる範囲で、楽しみながら地域の中で知ってもらおうよっていう活動をやる。それはもちろんクローゼットで関わりたくないひとに押し付けるものでもなくて、あくまでも、自分もやりたいと思った人だけでやるぜっていう。

そういう意味でのボランティアなんですが、まあ、ぱっと見は分からないよね。（笑）

藤：元々のボランティアの意味で使ってるってことですね。有償無償は関係なくて、自分からやることっていう。

誰かのため、ではなく

創：サークルを立ち上げようと思ったのは、オフ会で知り合った子が学校で嫌がらせを受けてたのがきっかけだけど、その子がやろうって言ったわけじゃないんですよね。だからなんて言うのかな、最初どこか「自分の独りよがりじゃないか」「偽善じゃないのか」そういうのもちょっと思ったりしてはいたんです。

でもそのとき「何かしたいっていうのも、結局自己満なのかも」と相談した高校以来の親友から「自己満でいいじゃん」って言葉をもらって。当時はまだきちんと意味を飲み込めてなかったんですけど、でも「それでいいじゃん」って言ってくれる人がいて、踏み出せた。

今は、「そっか、自分のやってることが、もし誰かのためになってるわけじゃなくても、そこを目標にするんじゃなくてまず自分のためにやろう」って考えてます。

藤：そうですよね。やっぱり、自分ではっきり分かる基準ってそこしかないですよね。結果を数値で出せるものでもないし、フラットな評価やフィードバックを受け取れる場所があるわけでもないですし。何を受け取って活動していくかっていうのは、いろんな団体の悩みどころだと思います。

創：うん、そこで他者の評価とかを軸に置いちゃうと、燃え尽きちゃったりこんなに頑張ったのになっていう思いが強くなっちゃったりしそうな気がしてて。ハードル下げて、あんまり反応は無いかもだけど、でも何もしなかったら自分に納得いかないからやろう、って感じで始めたんですよね。

小さな事でも、自分にとっては大きな意味があったりする

藤：スクランブルエッグで活動しだしてから、創さん自身でなにか変わってきたところとかはありますか？
創：ああ、もう全然変わりましたね。サークル立ち上げる以前から、オフ会はやってて、友達と知り合う機会っていうのは作れてたんだけど。その時の自分って、リアルな自分とクローゼットな自分の境界線がすごい分厚かったんですよ。結構がっちり分けてて、そういう生活をずっと続けてたわけですよね。 それでもまあやっていけるんだけど、自分の場合は何か物足りなかったのかな。楽しく交流するだけだと満たされないような。

　でも活動始めて、同じことを感じて、やってみたいって集まってくれた人がいて。居場所を作ろうと思って始めたわけではないんですけど、自分にとってはここが居場所になった。
藤：もやっとしたときに、今度話し合えるなっていう場所があると違いますよね。
創：そうなんですよね。何気ない雑談でも、真剣な話題でも、本当にいろんなことを含めて一緒に喜んだり怒ったりっていうことができる場所ができたっていう。気が付いたらめっちゃ拠り所になってたんですよ。
藤：そうだったんですね。確かに、個人的にオフ会をやるだけではなかなか見つけられない仲間、場所だと思います。

ヒロさんはそのままが一番

藤：この機に、ヒロさんへのメッセージとかはありますか？
創：そうだなあ、自分はわりと頭固いので、ヒロさんがこれこうやってみようかなって考えてることに、ブレーキかけちゃう方なんですよ。 細かいし、わりと保守的だし。だからそいうのとか、ほんとはどう思ってんだろうなと！
藤：あらそうなんですか。 ブレーキをかけてしまうというよりは、多分視点を出し合ってるということかなと思いますけれど。それぞれにインタビューさせていただいて、やっぱり二人はなんか上手く噛み合ってるなあと思いましたよ。
創：確かにそれもありますね。 ヒロさんもヒロさんで、アイデアマンだけど期限に間に合わないとか、忙しすぎてタッチできないとか……。もちろんそれはどうしようもないので、そうだと思って締め切りを早めにするとかはしてます。（笑）
藤：手綱を取られてる。（笑）
創：「期限だよー、ねえ期限だよー？」とか。（笑）

　でもやっぱり、あの海のような心の広さというか、全部ポジティブに受け止める、持って生まれないと持てないようなものを持ってて。絶対ヒロさんからじゃないと出てこないだろうなみたいな。

　なので、ヒロさんにはそのままでいてほしいなと。もっとヒロさんのキャラクターをみんなに知ってほしいですね！
藤：すごい貴重な人材ですね。マスコットとも言われてましたし、愛されキャラでもあって。
創：そうそう、ぜひこれからもそのままでね。年老いてもそのままでいてほしいですね。
藤：想像できちゃいますね。ありがとうございました。

今年の夏は、久しぶりにイベントで会えるかも・・・？

＊＊＊＊＊

　4月からスクランブルエッグメンバーになりました、藤です。

　今回のインタビューで、「スクランブルエッグの代表になる方って、やっぱり人が集まるだけの温かさのある人なんだなあ」と、改めてほっとしました。なにより、創さんもヒロさんも話していて楽しくて（そして一緒に動物を可愛がってくれる）、癒しの時間でした！

　カルチュアロードが共通の思い出深いイベントだったり、活動にあたってどんな思いでいるのかそれぞれ伺えたり、入ったばかりの良いタイミングで真剣な思いをしっかり聞かせてもらえました。

　そして、インタビューを通して「同じ思いのひとと、それぞれできる範囲のことで活動していこう」という方針を、たまごのメンバーを守りながら発信を続けていくために、欠かせないものだなと実感して自分の中にも取り込めた感じがしました。これからよろしくお願いします！

（藤）

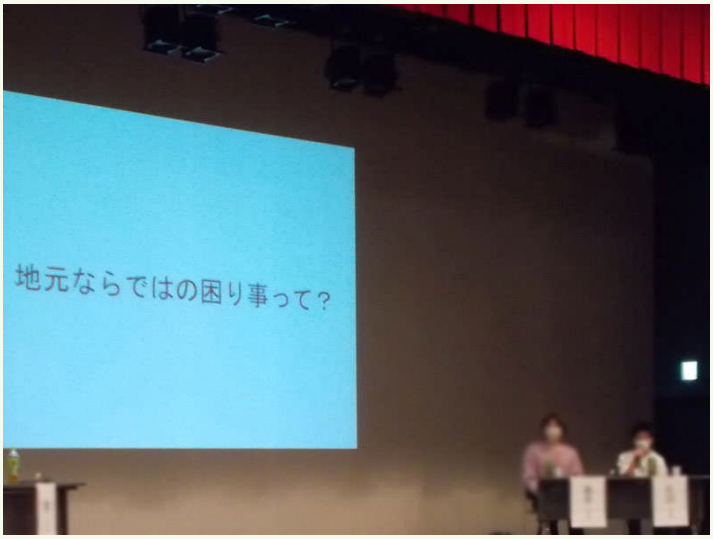
たましポ

レポート04　sideA

2022年11月22日、弘前市民文化交流館ホールで開催されたひとにやさしい社会推進セミナー「聴いてみよう！　地域で暮らすLGBTのお話」（主催：弘前市）にて、スクランブルエッグのメンバーがお話をさせていただきました。

今回は、私は聞き手としてLGBTの講演会に参加しました。実は、コロナの影響で、今回の講演会が私が参加する初めてのLGBTの活動となったので、どんなことになるのか、何が聞けるのかワクワクしていました。

お話を聞き、まず、全体を通して強く感じたことがあります。それは、「もっとLGBTをそばにあるものとして感じてほしい／壁を壊したい」という語り部の皆さんの強い思いでした。



身近なところで共に生きている当事者達の声

お話の題目はたくさんありましたが、多くがとても身近な題目で、当事者の方々のよりリアルな感想を聞くことができました。また、「LGBTが使いやすいトイレとか、困っているのはTの人なのに、LGBもひとまとめにして考えられがち」、「LGBTの人たちは夜の職業しかできないとどこかで思われているところかある」、「偏ったLGBT情報が当たり前になってて、テレビ業界のLGBTの方々の姿が当たり前のように覚えられているのが困る」など、語り部の方々の生活や経験上困ってしまったことが挙げられました。そして、その都度「LGBTのみんなも、マジョリティのみんなと変わらない個性があって、個々に生活を、送っているのだ」と説明がありました。最近は「LGBT」も話題に上がるようになってきたけど、認識度、解像度はまだまだなのだと知り、今後頑張って認知度の向上に協力できたらいいなと思いました。

壇上でヒロさんや創さん、あきさんが話した「性別のマジョリティ、マイノリティという言葉がなくなるくらい、区別の壁がなくなるくらい、お互いの存在があたりまえにあるようになればいいのに」という言葉が、とても胸に響き、何度も頷いていました。そして、こういった活動が、それを願いではなく、現実にしていくのだと感じ、今回の講演会の大切さ、必要さを改めて認識できました。

講演の中では、LGBTのお話では珍しく、「嬉しかったこと」という明るく可愛らしい話題もありました。困難が多めの傾向にあるLGBT当事者から、苦しいこともあるが、一方では嬉しいこともあると教えていただき、私はそれがとても希望になったし、嬉しかったです。

LGBTの人たちが生きやすい社会とはなにかを、当事者が答えてくれる、本当に素敵な講演会だったと思います。参加できてよかったです。

（キイチ）

＊＊＊＊＊＊

平日の夕方からという時間帯にも関わらずご来場くださったみなさんは、メンバーのお話にじっと耳を傾けたり、何度も頷いたりしてくださっていました。会場が不思議な一体感に包まれているようにも思えたのは、クローゼットである話し手のために安全な場所を作ろうと弘前市職員のみなさんが気を配ってくださったり、来場者のみなさんが真剣に私たちと向き合ってくださっていたからかなと思います。ステージからお話していても、一対一でお話しているかのような気持ちになりました。

たくさんの感想も寄せていただき、お話したメンバーにとっても充実した、得るものの多い体験になりました。機会をいただき、ありがとうございました！

（創）

たましポ

レポート04 sideB ヒロでトークイベントの巻

創さんによる
基礎講座のあと、
いよいよ登壇!!

緊張と照明で
変な汗がでてる→

Q.地元ならではの
困り事って?

スクリーンに出てくる
お題に沿って、
創さん・ヒロさん 私が、
それぞれの立場 経験から
答えたり、話し合ったり
しました!!

"なぜ今日登壇したか"の
お題は、少しまじめに
語りました。
控え室で、「まじめな話は
創さんに任せてゆると
話しましょうねー^^」
なんてヒロさんと
話していたので、

話が違うじゃないか…
というヒロさんの顔が
私的ハイライト(笑)

最後は質問タイム☆
紙に書いてもらった質問を
手分けして答えるスタイル。

えー質問いただきました
「日本で手術はできるの?」
ありがとうございます。
これはですねー…

ラジオDJみたいで
楽しい☆☆

市が主体となって
こういったイベントができる
ってとてもありがたいですね。
セクマイにとって地方は
まだまだ生きづらい状況では
あると思いますが今後も
ゆるっと楽しく活動したい
と思います

さあ撤収だ

また機会があれば
トークイベントで会いましょう!
撤収の早さには
定評のある
スクランブルエッグでした!

セミナー行ってきたよ

～編集部冥の雑談～

2023年1月30日、弘前市が主催した、『「知る」から始める性の多様性セミナー～多様な人材が活躍できる職場環境について～』に、2人で参加してきました。

LGBTフレンドリー、みたいに言われる企業は増えてきていると思うんですが、青森にいるとあまり実感できなかったりしますよね。今回は実際に取組みをしている全国規模の企業さんのお話が聞けましたが、いかがでしたか？

企業勤めのクローゼットとして羨ましいなと思いながら聞いていました（笑）
第2部のテーマが「性的マイノリティの人"も"働きやすい職場環境を考える」でしたもんね。LGBTフレンドリーになることがゴールじゃなくて働く環境の向上が目標なら、非当事者も協力しやすいのかも。

“も”でしたよね、それ僕も思いました！
性的マイノリティだけじゃなく、労働環境で悩んだりしんどい思いをしてる人はいますよね。それを個人の問題にするんじゃなくて、みんなで・会社で考えるっていう風通しの良さそのものが、働きやすさに繋がっていそうだなと！

お話ししてくださった方達も楽しそうでしたよね！ プレゼン資料も充実していたし。
私の勤務先もSOGIハラに関する研修があったり少しずつ性的マイノリティへの理解が広がっていますが、社外にアピールできるほどまではまだ･･･。

へええ、地元でもSOGIハラに関する研修が･･･！
プレゼンしてくれた企業さんも最初は手探りだったみたいですし、小さな一歩でも、その一歩を踏み出してくれる企業さんがもっともっと増えたらいいですね！

地方はどこも人手不足で人口も減っているし、人材確保という面から見ても誰もが働きやすい環境づくりは必要不可欠だと思います。
モデレーターの山下さん（弘前大学男女共同参画推進室・助教）も、就活中の学生さんにLGBTフレンドリーな企業について聞かれたとおっしゃっていましたね。

これからの時代を担う学生さんや若い人たちの価値観は、もう既に多様なんですね。企業だけでなく、いろんな場面でリーダーシップをとる人たちに、「自分が先を行くぞ！」の意気込みで取り組んでもらえたら嬉しいな～。

スマッシュヒット！

SMASH HIT!

たまごメンバーが個人的にオススメする本・映画・ドラマなどの情報

『先に愛した人』
2018年／台湾／監督：徐誉庭、許智彦

死んだ父親は保険金受取人に男性の恋人を選んでいた。思春期の息子は、その事実を知り激怒する母親と捉えどころのない父親の恋人に振り回される。

……あらすじだけ読むとシリアスな物語のようですが、コメディとして紹介させてください！マイペースな大人たちと冷めた息子のやりとりに思わず笑ってしまうシーンの多い映画です。少しずつ明かされる父親と恋人の恋模様は切なくもありつつ、とってもキュート。遺された者同士、セクシュアリティの違う者同士、完全に分かり合えることはなくとも彼らの未来を応援せずにはいられません。ノスタルジックな台湾の風景も見どころです。

『煙たい話』　林史也／光文社

国語教師の武田と花屋に勤める有田は高校の同級生。卒業以来疎遠になっていた二人だが、猫を拾ったのがきっかけで関係が変わりはじめる。恋人とも友人とも家族とも違う二人の物語。

「名付けようのない関係の二人」が登場する物語は数多くあれど、それ自体を主題にした作品って実は珍しいのかも知れません。取りこぼされがちな、でも私たちの周囲にもきっと存在する人と人との距離感が静謐な筆致で慎重に描かれています。武田と有田、その周囲の人々の関係に思いを巡らせるとともに、私たちが当たり前に使っている恋人や家族といった言葉の定義について改めて考えるきっかけになりました。

（あずき）

青森県内での自治体の動き

ここ数年、青森県内の自治体でも、性の多様性に関する取組みが目に見えるようになってきました。特に2020年12月、東北地方初となるパートナーシップ宣誓制度を弘前市が導入したのを皮切りに、2022年2月には青森県がこれも県としては東北初となる制度導入を発表し、大きな話題となりました。

そして2023年3月には八戸市が、多様な性のあり方に関する職員ガイドラインとして「八戸市職員にじいろガイドライン」を作成し、市のホームページ上でも公開を始めました。職員向けのものなので、パートナーシップ宣誓制度のようにニュースに取り上げられたりはしなかったように思いますが、拝見して、行政職員として、また一市民としてどうあるべきかを真剣に考えて文章化してくださったと感じ、本当に嬉しく思いました。

制度の導入は、直接的な効果以上に、行政の方針や肯定的なメッセージを多くの人に伝えることができるという意味で、大きな意義があると思っています。また職員向けのガイドラインの作成と公表は、まず自分たちが率先して行動し、個人の尊厳に関わる大切なものとして性の多様性に向き合っていくのだという、行政としての意思を表明しているように感じました。

性的マイノリティについて十分な情報が得づらい地方において、これらの取組みを行うことは、決して簡単なことではなかっただろうと思います。だからこそ、この動きがさらにその先へと続き、広がり、いつか性の多様性が当たり前のこととして根付き、一人ひとりが違いを含めて大切にされる社会になることを、心から願っています。　（創）

東北大学病院に ジェンダー医療センターが開設されました

青森県のみならず東北地方では、GID（性同一性障害）学会認定医がいないなど、性別違和に関する医療を受けることが困難な状況が続いています。特に、各種の治療をしようとする場合や生活上の困難軽減のために「診断」を希望する場合がありますが、この診断を得ることさえままならないのが東北地方の実情です。

そのような状況の改善を目指して、この度、東北大学病院にジェンダー医療センターが開設されました。他地域の専門機関のサポートを受けつつで、まだ性別適合手術を含む身体的治療が行えるようになるまでは時間が必要かと思いますが、「どこで相談できるかわからない」という一番最初のハードルがぐっと下がったようにも思います。さらに東北各地の医療機関がこのセンターと連携して、入り口が増えていくと嬉しいですね！　（創）

発行元：スクランブルエッグ
発行年月：2023年4月
URL：http://gochamazetamago.main.jp/
メール：gochamazetamago@yahoo.co.jp
表紙イラスト：藤

☆最新情報はこちらでチェック→ @gochamazetamago